才色兼備なバカップル？

秋槻怜耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
才色兼備なバカップル？

【Ｎコード】
Ｎ００７４Ｏ

【作者名】
秋槻怜耶

【あらすじ】
ある事情から、まともに恋愛をしたことのない美少女が、ふとした切っ掛けで、美人な男の娘に恋をした。　でも、その事情で自分から恋愛ということに踏み込めない少女。　そして、悪化するその事情。　もう、全てを諦めたときに彼がやって来た！！　山なし谷なしの、ほのぼの完全ラブラブもの。ただひたすらに甘いだけの世界。水飴のガムシロ割りをご堪能あれっ！！

1．私は美人に恋をした（前書き）

取り敢えずＲ１５指定にはしましたが、どうなるかは未定です

1．私は美人に恋をした

目の前の男の子が、指を五本立てる。さっきは、三本で『どう？』と訊かれた。

「私はそんなことする気ありません！！」

私は同級生の男の子を突っぱねて足早にその場を逃げ出してきた。

はー……最早私は、溜息しかでない。

こんなことは最早日常茶飯事。いいのか悪いのか、もう慣れてしまった。

初めてそんなことを言われたときには、なんのことか分からずに思わず聞き返してしまった。

そして、その子から事の内容を聞いた瞬間にその子の頬を叩いて駆けだした。

その後落ち着いて見ると、自分が周りの男の子からそういう目で見られているのだと思うと悲しいのと苛立ち、恥ずかしさで泣きじゃくったものだ。

それから、暫く学校へ行くのも憂鬱になる程だったけど、今ではもうそんなことに一々気を取られている訳にはいかない。

一体彼で何人目だろう？

そういう誘いは本当によく受ける……ん？　受けるって、引き受けるってことじゃないからねっ！！

私はまだなんだからね！！

っごほん！！

本気の告白の方が、数が多いって云うのがまだ救いだけど……

やっぱりそういう目で見られているというのは気分が悪い。

私は遊んでるような女じゃないんだからっ！！

でも、話によるとだからこそ余計に男の子にはたまらないらしい

ってことを、美百合(みゆり)が言ってたっけ……

私はある事情から極一般的な女子高生としての恋愛が出来ないでいる。

誤解のない様に言って置くけど、別に私個人に何か問題がある訳じゃないよ。

ただちょっと家庭の事情があるだけで……

そして、ああやって誘ってくる男の子たちはその家庭の事情を知ってそうやって来る。

逆に告白してくれるような男の子たちは、それを知ってそれだけで離れて行ったりすることもある。

中にはそれでもちゃんと付き合おうとしてくれる人もいるけど、付き合うなら私だってちゃんと相手を知ってからじゃないと無理だもん。

直ぐにはO．K．出来ないから、先ずはお友達からってことで始めるんだけど、私がまだ相手に好意を持つ前に更に殆どの人とは切れてしまう。

っで、最終的に残ってくれる子もいる、けど今度は私が彼らとは彼氏彼女という付き合いを出来そうにないから、振ってしまうわけだ……

別に私は、そこまでの理想を掲げてる訳じゃない。ただ私に対して誠実に優しくしてくれれば、多分コロっといってしまうと思う。

でも、私に近づいてくる男の子にはそういう子がいないんだよね……

あの条件はそんなに高いとは思えないんだけどな……？　やっぱり男の子ってやりたいだけなのかな……？

は～あ～、私のことを全て受け入れてくれる様な王子様はどこに

もいないのかな？

ドスッ！！

そんなことをぼんやりと考えながら、とぼとぼと歩いてたら誰かにぶつかってしまった。

「ごめんなさいっ！！」

基本的に小心者の私は即座に謝った。

「こっちこそ済みません。ちょっと考え事してたものですから」

私が頭を上げると、そこにはとっても綺麗な人がいた。

私はその人から目が離せなくなった。

初めて見た。こんなに綺麗な人。

本当に美人……

「でも良かった。君みたいな可愛い娘に怪我させてなくて」

ドクンっ！

私の心臓が大きく跳ね上がる。

なんだか、心臓を鷲掴みにされた感じ。これって、多分アレだよね……

そうアレだよね……

私って実はそっちの方の人間だったのか……

なんて、思ってしまった。

こんな美人から可愛いと言って貰えたのは嬉しい気持ちもあるけど、恥ずかしい気持ちもある。

私はただ顔を赤くして、この美人に見とれるとこしか出来なかった。

「それじゃ、僕はもう行くね。ホントに、ごめんね」

そう言って、男の子は去ってしまった。

……？

男の子？

うん、男子の制服着てた。

さっきまでは、顔しか見て無くて気付かなかったけど、確かに男子の制服姿だった。

『僕』って言ってたし、声もちょっと高めだったけど、男の子の感じだった。

男の子って云うよりは、男の娘って感じ？

私は自分がそっち系の人間じゃなかったことにちょっと安心した。

そして、生まれて初めて一目惚れ――もとい、恋に落ちたのを確信した。

2．『病』は気から

フッと気がつくと、彼女は自室で家計簿を付けていた。
（アレっ？　私今まで何してたっけ？）
学校から直でバイト先まで行って、仕事をしたのは憶えてる。
でも、内容が思い出せない。
（お金の受け渡しとか、詰め合わせとか間違ってないよね……？）
あの男の娘のことを考える余り目の前のことが疎かになっていた。
作業はした記憶があるが、これが今日の記憶なのか以前の記憶なのかが丸っきり判断がつかない上に、細部のことが思い出せない。
体が覚えてるってこういうことかと妙な納得はしたものの、ことがバイトのこと、お金に関わるようなことであるだけに、気がつくと不安が募る。
「は～」
（どうしよう？　おばちゃんたちに迷惑掛けてなければいいけど……）
バイト先の気の良い老夫婦には大変お世話になっているだけに、迷惑を掛けるだなんてことはしなくなかった。
多分大丈夫だとは思う……と言い聞かせては見るが、端から『多分』と『思う』を使っている時点で、相当な不安が垣間見える。

暫くは仕事がどうだっただろうか悩んで見たが、分かる訳もない。
明日もバイトがあるから、何かあったらそのとき謝ろうと決めて、この話題は打ち切りにした。
そして、現在の目の前の家計簿を睨む。
……一つ一つ確認していく……
「……よしっ！　こっちはO．K．」
我ながら、無意識でも間違いがなかったことに若干の誇らしさと、これならばという安心感が沸いてきた。

しかし、家計簿の内容を鑑みるには喜べない……
「はー、いっそ現実が間違ってくれてればいいのに……」
意味不明な愚痴がこぼれてしまったが、それ程に悲惨な内容だった。

今家計は彼女によって切り盛りされている。
父親は数年前に病気で他界したが、母親は現在も生きている。
しかし、生きてはいるが、身体的な疲労と精神的な苦労から病を患い現在は入院している。
身体の強さは人並みにはあるが、まだまだ幼い子供たちを四人も抱えての母子家庭だけに、気苦労が絶える事はない。医者の見立てでは、ゆっくり療養すれば直ぐに良くなるという事だったが、子供たちに苦労を掛けて自分が病院で休んでいるという状況が、責任感の強い彼女の気苦労の素となり、悪循環を引き起こしているために、当初一月（ひとつき）・二月（ふたつき）程度で回復すると言われていたが、半年経った今でも病院のベッドから動くことが出来ないでいる。
娘としては、ゆっくり休めているのなら、今まで独りで苦労してきた分休ませてやりたいという思いであるが、何分そういう状況ではないだけに、早く良くなって欲しいと願うばかりだ。
退院して直ぐに仕事を始めて欲しいという訳ではない。
確かに今はかなり切迫している状況だ。もし、可能ならば……と正直思わないでもない。しかしそれは家族想いの娘の立場からして、考えてるだけでも良い気分はしない。
だが、働かなくてもせめて退院だけ――否、最悪自宅療養でもというのは切なる願いだ。
病院という離れた場所に預けているよりは、今は近くにいてくれるということだけでも、彼女にとっては心強いことだから。
それだけに留まらず、経済的にも……と、頭の片隅に浮かんでしまう彼女は、そんな自分に嫌悪感を抱かずにはいられない。
大切な母が、病気で苦しんでいるのだ。それに金銭の都合を挟む

など、何と恥知らずなことかと思ってしまうのだった。
だが、逆にそれが今の彼女たちの経済状況を如実に物語っている。
彼女は真面目で家族想いの娘だ。
そんな娘が、そんなことを考えずにはいられない状況、それが今彼女たちの置かれている状況だった。

「はぁ〜」
（四の五の言わずに、受けなきゃいけないかな……）
彼女にとってはそれはとても深刻な問題だ。
一つ下の妹に、その二つ下の弟、そしてその更に一つ下の弟の四人―姉弟で、自分はその長女に当たる。
下の姉弟（きゃうだい）たちに侘しい生活はさせられない。みんなまだまだ伸び盛り（自分のことは含まない）なのだ、金額は兎も角栄養面を削減する訳にはいかない。
しかし、かと言ってそういうことを軽々しく許したくはない。
否、好きになった男性（ひと）以外とは、本来ごめん被（こうむ）りたい。
こう言っては嫌な女だが、彼女は自分でそれなりの容姿をしているという自覚がある〔からと云って、それを鼻に掛ける様な娘でなない〕
更に、自分で言うのは相当に恥ずかしいことだが、自分は純情な乙女だとも思っている。
性的知識はないこともないが、それは性的興味本位から来るものではなく、人として女としての嗜（たしな）みとしてだ。
無垢であるのと無知であるこは違う。
無知であることは危険が大きいということだと彼女は思っている。だからこそそういった知識は、自分の身を守るためにもとても重要なものだという考えから、ガールズトークでも公言することは殆どないが、知識としては人並みにはあるつもりだ。
他人（ひと）はそれをむっつりだと言うかも知れないが、何かがあるよりはずっといい。

それ故彼女は、自分の仕入れた知識を妹にも話して、男の子に対する最低限の警戒は怠るなと常日頃から注意を促している。大切な妹なのだ、『間違い』ということにはなって欲しくない。
好きな男の子がいて、正式に付き合うことになったら、きっとそういう関係にも発展するだろう。でも、それは『間違い』ではあってはならない。
お互いが真摯な想いの果てであってこそだと思っている。
そして、それは妹だけではない。出来ることなら自分もそうでいたいと、そう切に思い願っている……

▽▽▽▽

昨日は、余りに悲惨な家計簿の在り様につい思考が一段階ぶっ飛んだところにまで行ってしまった。
まだ、残り僅かとはいえ母の蓄えがなくなった訳ではない。その間に何か転機が訪れてくれれば……
（って思っているだけじゃ、どうにも成らないんだよね……
かと言って、今は妙案もあるわけでなし……と）
『はぁ～』と、またため息が漏れた。
（ああ、私の王子様っ！！　どうか、私に救いの手――っ！！）
そこでまたフッと彼の顔が頭を過った。
本当に綺麗な男の娘。
彼女の思考は、たま彼に占領された。
時期は五月の後半。寒さや暑さで顔が赤くなる様な時期ではないが、彼女は顔がずっと赤いまま、登校した。

▽▽▽▽

「どうしたの、マユリ？　顔赤いよ？」
教室に入って来るや否や、彼女の隣の席に鞄を下し、彼女の顔を

覗き込んでくる。
「っん？　ああ、おはよう。美百合」
いきなり、目の前に度アップで現れたにも関わらず、マユリの反応が鈍いことに、疑問を感じる実百合。
「おはよ。調子悪いの？」
「ん～うん、そういうわけじゃない？　あ～いやでも、ある意味そうかも……」
『？』当然ながら、マユリの返答に更に困惑する。
「何よ？　私に言ってみなさいよっ！！」
「あのさ……」
マユリは暫し沈黙する。
マユリは自分がこれから言おうをしていることが、実はとてつもなく馬鹿げたことでないのか？　と、悩んでいた。
しかし、目の前にいる少女。牧瀬実百合ならば、若しかしたら彼の情報を持っているかも知れない。という、あわい期待もある。
実百合は、小学校からの付き合いでマユリにとって一番の友達だ。
彼女は、昔から学校の様々な情報に詳しく、無論男の子に関する情報も完璧だった。〔因みに、彼氏持ちで彼以外の男の子には『男として』興味がない。調べているのは趣味で、用途は女子の話題だそうだ〕
「えっと……ね？　この学校に、女子より綺麗な男の子って……いる？」
そう言って見た先には、実百合の半眼があった。
（ああ、やっぱりっ！！　言わなきゃよかった……、実百合が呆れてるっ……）
マユリは落ち込む。
やはりそんな男子がいる訳ないかと……
昨日の彼はきっと、自分の見間違いだったのだ。
丁度、王子様でもいないかな？　などと考えていたときだ。きっとそれで、自分がかってに美化してしまったのだ。

きっと実物の彼は並み以上には良い容貌の男子(こ)なのだと思う。更にそれを自分が、王子様風（？）〔というには、些(いささか)か男気に欠けるが〕に美化してしまったに違いない。
その可能性は考えていた。
（だってあの容姿だもん、普通いる訳ないよね……）
でも、それを押してでも訊きたかった。万が一にも、という可能性を信じて……
「アンタ何言ってんの？」
心底呆れたっと言わんばかりに、実百合が片手で自分の頭を押さえながら返す。
マユリはその態度に、自重すればよかったと後悔した。

「そんなのいるに決まってるじゃないっ！！！！」

（はい……？　今、彼女は何て言いまして？）
マユリの頭は実百合の言っていることが信じられなかった。
「いるの？」
「何よ？　自分から訊いて来たんじゃない？」
「だって、すっごい美人だよ！？　男の子だよ？　女の先生じゃないよ？」
は～っと、実百合は大きく溜息をついて、ゆっくりとマユリが聞き取り易いように話始める。
「そうよ。間違いなくいるわよ。
とびきりの美人で、女生徒より女の先生より断然綺麗な？お・と・こ・の・こ？」
（いるんだっ！！　あの男の娘）
マユリはジーンと胸が熱くなった。
自分の美化した妄想なんかではなかった。
確かに実在した。そのことだけでも、嬉しくて堪らなかった。
「ってゆーか、フツーこの学校通ってるなら誰でも知ってるわよっ

！！！？

それ、一体今いつ話だと思ってるわけ？　もう五月よ五月！！六月も近いのよっ？　そんな話は、入学式から一週間で誰もしなくなったくらい有名よ。

私は、今の今までアンタが知らなかったって方が、呆れを通り越して驚きだわ」

実百合のお小言なんて、なんのその。

今のマユリの心には、彼の顔が浮かんでおりそれ以外の何も考えることが出来ないでいた。

「なるほど。それで、体調悪いわけでもないのに、『病気』ってわけね（笑）」

2. 『病』は気から（後書き）

最初の部分はストーリーをつくる部分になるので、あまり甘みのある話はありません
暫く、そこまで行くのに少し時間がかかるかと思います

そして、その後の展開はぶっちゃけ何も考えていません
兎に角作者が、このシュチュ甘いなーと思うことを適当に書き綴っていくだけで、取りとめのないものになる可能性が大です

3．初恋は神様？

マユリは放課後はバイトをしなければならないので、早々に帰宅する〔とはいっても、自宅へ帰るわけではなくバイト先へ行くわけだが〕

その都合で、放課後に話し込むということが出来ないので、彼の話はバイトが終わった後でメールですることになった。

バイトは昨日のことが不安だったが何事もなかったので、今はなんの気兼ねもなく実百合とのメールに勤しもうと、実百合に家に着いたとメールしたところ、メールではなく電話がかかってきた。

メールだと面倒なので、電話にしたということだ。

『っんで、彼のことは、何も知らないってことでいいのよね？』

挨拶を済ませると、実百合が前起きなく切り出してきた。

朝以降は、彼の話はしていない。というのも、あの後すぐにチャイムが鳴って話が打ち切られ、マユリとしてはあのタイミングが一番いいと判断したのだ。

業間休みや昼休みだと話が半端になってしまい、授業に集中する自信がなかったからだ。

「うん」

『まあ、私もそこまで詳しく調べられなかったから、誰でも知ってる様な基本中の基本ね。

彼の名前は、近衛守璃（このえしゅり）――』

（女の娘みたいな名前……羨ましいな……）

自分の“名前”とは違って、男の子なのに女の子みたいな名前だということが、実に羨ましかった。

皆が呼ぶマユリという名は、名字であって名前ではない。

自分の名前は、男の子なら格好いい響きの名前だが、女の娘に付

けるような名前ではないと思わずにはいられない。
カタナ――――それが、彼女の名前だ。
親から付けて貰った大事な名前なので、嫌いということはないし大切にしたいとも思っている。
しかし、その名前の所為で幼い頃に色々不快な目に遭ったことのある彼女にとっては、どうしても大好きと言えなかった。
漢字も発音も『刀』じゃなくて、『片奈』で『カタ・ナ』なのに、子どものときは男の子たちから刀、刀と言われ続けたせいで、今では発音によっては女の娘の名前にも聞こえる名字の方を、より好んで呼んでも貰うようになってしまった。

そんな自分と違って、彼は容姿もその名に相応しく並の――それどころか、あれ程の美人などテレビの中でもそうはいない――女性よりも余程綺麗だ……〔それが、彼にとっても褒め言葉になるかどうかは兎も角としても、そう思う気持ちは抑えようがなかった〕
羨まずにはいられないのも当然だった。
『――坂崎二中出身。見ての通りの眉目秀麗、スポーツ万能だけど部活は無所属、頭脳明晰で常に学年トップクラス……って！！　そう言えば彼、新入生代表だったじゃないっ！！　なんで今更興味持ったのよ？』
「えっ？　そうなの？」
丸っきり記憶にない……
『は～……まあ、いいわ。取り合えず、こっちは情報教えてあげるんだから、理由は後で聴かせなさいよね』
「……うん」
全く大した理由ではないが、話すのはやはり恥ずかしい。
それに、全くなんのエピソードとも言えない内容だけに、美百合から反感を買いそうで怖いという気持ちもある。
『っで続きだけど、嘘か誠か同じクラスの女子に集（かた）ってたって理由で、たった一人で族を壊滅させたことがあるらしいわ』

「喧嘩？　なんか、全然想像つかないな～」
『まあ、所詮は噂よ？　同じ中学の子たちでも、ホントかどうかは分からないってことらしいし……
　でも、同じクラスの娘が不良に絡まれてたのを、彼が助けたってのは本当みたい。多分、そこら辺に尾ひれかついてるってところだと思うわよ。
　それに、体育の柔道でクラスの男子を軽々投げ飛ばしてたってことらしいから、強いってのは強ち間違いでもないんじゃないかな？』
「へ～、なんだか凄いね」
　電話越しから、溜息が聞こえてきた。
『ホントにアンタは今更ね～……どうしてその凄い話を今の今まで知らなかったのよ？』
　マユリは、ハハハと苦笑いを返すことしか出来なかった。
　だが、そのことも長い付き合いのある美百合には分かりきっていることなので、これは単にマユリで遊んでいるだけだった。
『はぁ～……まあいいわ。っんで、“恋愛の神様”らしいわよ？』
　ん？っと、流石にこの言葉には疑問を感じずにはいられない。
「どういうこと？」
『ん～～、私もあんまり詳しくは知らないんだけど……
　彼、あの容姿じゃない？　見た目からしても分かる様に、昔からすっごくモテてたらしいのよ』
「だろうね……」
（若しかして、もう付き合ってる女の娘がいるのかな……？　それとも、凄いプレイボーイ？）
『でも、噂じゃ告白をO．K．したことがないんだって。それに、誰かと付き合ってるっていうこともないらしいの』
（そうなんだ……良かった……）
　マユリは心の底から安堵する。
　そして、現行で誰とも付き合っていないという事実と、初恋の相手が自分の嫌いな女遊びをする様なタイプの人間ではなかったこと

に喜んだ。
だが、それでどうして“恋愛の神様”ということになるのか？
と疑問に思ったときだ。
『”だけど”――』
美百合の言葉が発せられた。
『――告白した娘とは、必ず親しくするんだって』
「それって、どういうこと？」
告白を断ったのなら普通は気まずくなるものだ。
なのに、敢えてそういう娘と仲良くするというのは……
（若しかしてやっぱり、プレイボーイ？　それも、彼女を沢山作るとかじゃなくて、ホントにただ弄んでるだけ……？）
今度は一転、どん底に落とされた気分だ……
『なんでも、女の娘から告白されてもお互いしらないことが多すぎて、付き合うことは出来ないからって、断るんだって。それでその後、取り敢えず友達として、親睦を深めてお互いを知って、そのとき彼が相手の娘を好きになったら彼から告白する、ってことなんだってさ。
でも今まで彼から告白したことはない見たいだけど』
その言葉でマユリの沈んだ心がまた浮き上がった。
普段は……いや、今までこんな風にコロコロ気分が浮き沈みをしたことはない。
好きな相手の情報に、ことある事に一喜一憂させられる。
マユリは自身が本当にあの男の娘に恋しているのだと、改めて自覚した。
『それで、ここからが“恋愛の神様”に纏（まつ）わる話。
そんな訳で、彼は凄い人数の女の娘と知り合いな訳よ。何も、近くにいるのが告った娘ばかりじゃないしね。
普通ならそれで、男子の反感を買うところなんだけど、彼の場合男子からも強い支持を受けてるらしいのよ。まあ、一部はやっぱりそういう一派もいる見たいだけど……まあそれは、置いといて。

彼の周りは常に色んな人がいて、彼がその誰とも親しく接するから、その周りに集まった人たちも、自然と仲良くなるんだって』
「それが縁結びになるってこと？」
『ん～、中にはそういうケースもあるだろうけど、それだけじゃないのよね』
「どういうこと？」
『そういう風に知り合った人たちの中で、彼が”お似合いだ”って言った二人は必ず付き合い始めるらしいのよ』
噂をかき集めた情報だけに、美百合自身も半信半疑――――よりも、はっきり言って真実3に着色7くらいの割合だと思っている。
『それで付き合い始めたカップは今のところ別れてなくて、然もラブラブみたい。
元は彼目当てに近づいて来た筈の娘でも、誰もが羨むようなラブラブなカップルになったりするとかで、そこから火がついたみたい。その内、恋愛相談に発展し始めて、更に彼に今付き合ってる彼氏彼女の相性を訊いて占いみないな感じになってったらしいんだけど……』
「だけど？」
『それが的中率１００％なんだって』
なるほど、もしそれが本当ならば確かに“恋愛の神様”だ。
『それが事実なのかは分かんないけど、でも同中の子たちに言わせて見れば、彼の言うことならそんな噂なんてなくても一聴の価値有りだ、って言い切ってた。
男女問わずにホントに信用があるんだって、彼のことを調べてたときつくづく思ったわ』

▽▽▽▽

美百合との話は実に二時間近くにまで及んでしまった。
美百合は詳しいところまでは調べられなかったと言っていたけど、

それでもこれだけ話が出来るから凄い〔然もほぼ一方的にだ〕
でも、彼女曰くそういう量の話ではなく、質的な問題とのことだ。
どれもこれも、噂という類のものばかりで確定的な話が少なかった。
『噂も人を計るバロメーターの一つではあることに違いはないけど、それは飽くまでバロメーターであってステータスじゃない。噂は所詮噂。本人から直接“感じた”ことと相まってなきゃ何の価値もないわ』
っと、美百合は凄く大人な意見を言っていた。

4．落ちるということは浮くということ？

彼を知ってからというもの、どうして今まで知らなかったのか本当に不思議だと思う程に彼をよく見かける。

まあ、こういうのはよくある受取手の問題で、頻度は変わってはいなくても意識がより向くことで頻発するようになったと勘違いするというもの。

ことそれが恋愛事となると『運命を感じる』という錯覚を引き起こす元凶でもある。

などと、１５の乙女にして穿った見方をしてしまう自分に多少辟易してしまう繭利片奈（まゆりかたな）。

さりとて、ほんの僅かな時間でも目の片隅にでも彼を捉えたらな、許す限り彼を見詰めるその仕草と視線は紛れもなく恋する乙女のそれだった。

しかし、もう自分の想いを彼へ届けることを片奈は諦めてしまっている。

それどころか、彼に対する――――いや、誰かに対する恋愛感情などもうなくなってしまえば……、なくなって欲しいと悲痛なことを願わねばならなかった……

人並みでいて、それでも人並み以上に自分は苦労している部類の人間であることを彼女は自身で知っている。

そんな彼女は人並みの少女以上に幼心を残したままに今に至る。

良く言えば純情、悪く言えば夢見がち。

更にそのことを自分で自覚している片奈に取っては尚のこと恋愛、特に初恋に対する思い入れは強い。

勿論、現実と想像の差のことは考えていた。恋に恋するという実のないことをする程にも愚かではない。

しかし、その気持ちをあらぬことで取り消さなければならないと

いう現実は余りにも辛い。
最近は覚悟をしていた”つもり”だった。
だが、本当につもりでしかなかったことを片奈は思い知る。
いや、きっとこれもまだまだだろう……きっと“その後”はこんなものでは済まない自己嫌悪と失望に苛まれるだろう……

「それでも、やらなきゃっ……」

唇を食いちぎるすんでの所まで力を込めて噛みしる。
名残惜しいが決別の意味を込めて、彼から視線を外した。

▽▽▽▽
《片奈サイト》

放課後、私はバイトを休んで空き教室で一人時間を潰していた。
日が沈み屋外の部活が終わる。
そして、暫くするとこの空き教室に一人の男子生徒が入ってきた。
「へ〜、まさかホントにいるとは思わなかった……」
相手の男の顔ははっきりとは見えないが、口元が若干にやついている様に見えた。
「ってことは、マジでオッケーってことだよな?」
私は無言で首を縦に振った。
男の子は私のところまで歩いて来る。
私の体は震えていた……
「そんなに脅えないでよ。約束通り、優しくするかさ!」

約束……こんなことをそんな風に呼ぶのは嫌だ……
約束ではなく、これは契約。
そうこれは商売なんだから……

「じゃ、じゃあっ！！いまっ、今……お金、渡して……逃げない……から」
私は自分の意志を固めるためにも退路を断つつもりで申し出た。
自分で言うのもなんだが私は真面目な性格をしている。
こんなことだが、もしお金を持ってしまったら断るのは無理だろう……お金のことが気になって逃げるのに戸惑う筈……
それを投げ捨てるにしても、お財布に入れてしまえば時間が掛かる。
その間できっと彼が捕まえる筈……
「オッケー、ホントに逃げないでよ。流石に俺も、金持ち逃げされてら怒るからね」
彼は五万円というお金を躊躇（ためら）いなく差し出した。
私はそれを震える手で受け取り感慨深く見つめた。

五万円……それは、私のバイト代に換算して二・三週間は掛かる大金……
それがたった数時間という時間で私のものになる……

「ねぇ？　この際だからさ、俺と付き合わない？」
「えっ？」
「ああ、安心して。金はちゃんと渡すよ。それにデート代とか全部ひっくるめて俺が面倒見るしさ。
繭利って処女なんでしょ？」
……処女、その言葉に私の顔はカッと熱くなった。
「だったら他の男にやらせるのは勿体ないし、どうせならお金だけで割り切った関係より、恋人同士で更に金まで貰えるって関係の方がお前だっていいだろ？
まあ、始めは顧客って感じで思って貰っていいしさ。その内、俺のこと好きになるよ」
凄い自信過剰……

でもそれはその筈で、彼は一つ上の先輩でサッカー部に所属しているウチの学校のエースストライカー。女子から人気が高く、今まで彼から付き合いを申し出て断り切れた女子はいないらしい〔勿論、これも実百合談〕

正直その申し出は嬉しい……

例え、そういうことが目的の関係でも多数の人を相手にするよりは、その方がマシだから。

それに、万が一にも本当に彼を好きになることが出来れば、きっと気持ちも少しは楽になる筈だから……

でも、私は即答出来なかった。

「……ちょっと、考えさせて……」

「いいよ。でも、出来れば他の男にやらせる前にいい返事聞かせてね」

私は彼から受け取ったお金を財布に入れる。

……入れようとした。

「ここで何してるの？」

突然声を掛けられて、状況が状況であるだけに心臓が止まりそうな程驚いた。

「こっ、近衛！！」

先輩が声の主の名前を呼んだ。

（しゅっ、守璃くん！！　どうして、彼が……！！）

「えっ、ああ……」

先輩はかなり狼狽している。視線だけでなく、挙動不審になり意味を成さない音を出していた。

「そのお金は？」

守璃くんが私の持っていたお金に目を付けた。

「あっ！！　ああ、この金な！！　これは、俺が繭利に貸してた金なんだ。それを繭利が返しに来てくれたんだ」
先輩はとっさに思いついた嘘をついた。
「こんな時間に？　こんな所で？」
「さっ、察してやれよ！！　女の子が金を借りたんだぜ？　みんなの見てる前で返せるかよ。
こんな時間になっちまったのは、繭利が俺の部活の帰りを待ってくれたからなんだ。
だよな？　繭利」
彼は必死に嘘を並べ立て私に同意を求めてきた。
「う、うん……」
私もそれに合わせた。
「だよな。わざわざこんな時間まで悪かったな。それじゃっ！」
彼は私からお金を毟る様に取って、急ぎ足で離れて行く。
「っじゃ、そういうことだから。じゃあな繭利、近衛」
彼は教室から出ると大きく足音を立てて駆け出して行った。

「用は済んだんだよね？」
目の前の状況に呆然としていた私に守璃くんが声を掛けてくれた。
正直に安心している自分がいる。
現れたのが彼であるという事実に、無根拠に運命を感じずには要られない。
それらを彼に感づかれないために、必死で隠して平静を装って答える。
「うん、もう終わったよ」
「なら、送ってくよ。こんな時間じゃ、女の子の一人歩きは良くない」

――――ドクンッ！！
心臓が痛い程に跳ね上がった。

（断らなきゃ……）

「大丈夫だよ。バイトでいつもはもっと遅い時間まで外にいるから」
「途中までなら道は同じだし気にしなくていいよ」

（駄目ダメだめ、断らなきゃ）
私は断るとこに必死になっていた。

「えっと……ちょっと用事があって、一度家とは真逆の方に行かなきゃ行けないの、だからいいよ」
「それも付き合うよ」

（なんで、なんで、なんで、なんで）
多分、外には出ていない筈だけど私はもう訳が分からなくなってパニック状態に陥り、固まってしまた。

「ふ～、なら率直に言うよ。僕にちょっと付き合って」
「はい」

（はい～～？　私、今なんて？）

断らねばならぬ筈のその申し出を、事もあろうに遠回しな言い方よりも、直接的な言葉に頷いてしまった。
ああ駄目だ……もう、私は後戻り出来ない。
家族を私が守るんだって決めてたのに、きっともう出来ない……
家族のためより、自分の身をあんじる様になってしまった……
もう、私は彼以外に触れられることを騙しながらでも好しと出来

なくなってしまった。
そのことを私はこのとき強く感じた。

4．落ちるということは浮くということ？（後書き）

この作品は、作者がもう一方連載していまうす作品で詰まったときに気分転換で書いている作品です
一度世に出した作品ですので、完成までは持って行こうと思いますが、更新はどうなるか分かりません
それでも、気長に待っていただける読者様が居れれば幸いです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0074o/

才色兼備なバカップル？

2010年12月6日10時26分発行